

⑰『会津藩家世実紀』

- 承応3（1654）年5月8日条　刊本一卷489頁

足軽三瓶忠左衛門：最上出身　鉄砲の名手　物頭樋口七郎右衛門預
- 延宝3（1675）年8月23日条　刊本3巻209頁

猪苗代士三瓶九右衛門
- 享和元（1801）年8月19日条　刊本15巻153頁

三日町組付三瓶幸助　長屋

〈付記〉

- 史料中の傍線は筆者が付した。
- 〔　〕は割書部分
- 以下は筆者による説明文

あとがき

柏木城はいかなる城であったか

鈴　木　　啓

永禄6年室町幕府の記録には全国群雄のうち、大名の53人が記されているが、南奥では伊達・蘆名のみで他は大名扱いではない。

米沢城主晴宗（奥州探題・守護）の孫、政宗の代になると、父祖の代を遙かに超えて絶頂期に達し、南奥は群雄割拠から統一に進む。

政宗是天正13年10月畠山氏、14年田村氏、16年佐竹氏・二階堂氏、17年相馬氏とことを構え、同6月伊達・蘆名の決戦となる。

蘆名の黒川城は平城で濠なく、防御性を欠いたから米沢～若松間の谷底道上に強固な柏木城を普請して決戦を予想した。行政機能を要さない番城は、防御と居住性中心の縄張りが欠かせず、守城優先の構造となる。軍学では防御と出撃に適した陰陽和合の縄張りを理想としたから、切岸・帯曲輪を通る道は攻城には複雑・急で屈曲鋭く連続柵形など不明確で、横矢掛や武者隠しが多く危険な通路となる。

城の縄張りや防御施設はどのように設計されるかは、軍学書にある。その代表的な例が『守城記』なので、城の構成を理解する一助として、その一部を抜き書きしてみよう。

本城の北西隅に設けられた櫓門。櫓門の北西隅には、土間に築かれた土蔵がある。

籠城の蓄積物には、米・麦・豆・粟・稗・糯・飼草・塩・海草・芋・莖・干葉・干魚・鰹節・漆・渋・鉄・鉛・火薬・弓矢・鎗・鉄砲・火縄・紙・縄・釘・竹木・板・藁・菰・薪・油・蠟燭・綿・布・炭・薬種などがある。多くの倉庫が必要である。

守城兵と持口配り（配置）は10分の3は旗本・近習（主郭守兵）、10分の4は外郭線守兵、10分の3は遊軍（転戦守兵）に分割する。外郭線の虎口はその大小広狭に応じて兵を配分し、虎口間（平という）にも割付け、何間持場と定める。

城中堅固の平は老兵に守らせ、城兵少ない場合は壮士に守り難い箇所を配る。家中諸士の他、武具・細工工人・鍛冶・番匠・壁塗等の類は城中に籠るべし、其外無益の女童等は籠置くべからず。職人も籠城している。

根城（本城）に籠る時、兵多城狭くして惣構の内の市店を守勢の宿所に配与へ、或は家なき所には小屋を掛けて宿せしむる也。諸方の砦より本城へ集り来る勢又他国の浪人或は近国より加勢等兼て宿所なき輩なり。

茶道料理人坊主台所の小役人等は、本丸台所に置べし。弓鉄砲の足軽は頭々の屋敷に置べし。（台所は本丸に置かれる）

本城の櫓に昼夜とも遠見を置き、鐘太鼓を置、時刻を知らせ敵の押寄る時、又火災有時相図を定置て諸手へ知らしむべし。遊軍の内、廻番の者、惣構の内小路々々残らず巡行する也。

矢倉々々其外役所は夜は燈を点じ俄に変有時、周章せざる様になし、又常に怪き者忍来杯見顕すべし。門々は昼夜とも扉を閉置、又出入する時は相言を以て改め、疑無時は潜戸より通すべし。夜は篝を焼き、或いは大挑灯を燈して出入を改むべし。

旗本出勢の時本丸にて合具（法螺）にて三段の相図を成し、諸士兼て定置立場へ集る也。

諸手物主（指揮者）の出勢人数を集る相図は、拍子木・銅鑼の類で本丸相図と紛れざる物を用ゆべし。寄手よりは必ず城兵を引出して、取て返して付入にせんとし、或いは城兵を遠く引出して他の攻口より其虚に乗じて急に乗取り等の謀をなす故に、城際に攻来る敵を追立るとも、追討一町に過ぐるべからず。

敵俄攻（短期攻）にする時は、先味方の鉄砲を頻に放て猶退かざる時には、遊軍を増加して益急に放つべし。向より打んよりは横に打に利あり、横に打んよりは敵の蟻附したる後勢を打崩に其利あり。敵猶進んで屏を乗越んとする時は、走矢倉に上て槍長刀にて突落し、切落すべし。

以上、『守城記』の一端である〔（　）内は筆者〕。

守城戦術があって縄張り・構造がきまることを、肝に銘ずる必要がある。

柏木城の中心部は広く平坦で戦闘指揮所らしく、大勢の兵士が複雑な命令に即刻機敏に反応できるように幅広い帯曲輪が用意されている。

石積みは土塁の補強と銃弾除けの施設で、長い石塁は、攻城軍を横隊から縦隊侵入に変えさせての側斜（横矢）のためと考えられ、平城・中村城の捨堀と用途は同じであろう。

虎口1の大平石は積石の中に配されているのではなく、単独の立石なので鏡石とは異なり信仰上の施設ではないだろうか。磐瀬郡長沼城の本丸下の帯曲輪に、巨石が立てられ、摩利支天石（武士の守り本尊・化生石）と記録にみえる。仏教では摩利支天は陽炎の神格化されたものであり、兵火の難を救う軍神とある。

柏木城の、恐らく東北地方に唯一遺存するのではないかとされる馬出は、絵図上では各所の城郭にみられるが、仙台城・二本松城などでは塁濠線に沿って構築されていることがわかる。これは攻城軍に巻き詰められて孤立した時、矢弾で応戦しながら怯んだ隙に突撃して形勢の逆転を計る起死回生の施設である。柏木城では主郭東の大型の堀切の外にあり、両者の連絡には木橋（引橋か桔橋）があったろう。馬出の東には曲輪4があり、その用途は不明なので、時間差の普請も考えなければならない。馬出をはじめ本城中心部は何があっても守り切る気概の伝わる縄張りと言えよう。

まとまりのない守城兵は単純連郭でもよいが、大軍が一体行動の場合は囲郭式配置、居住部の肥大化となろう。

東京都八王子市の滝山城は50区画（郭）程あり戦闘性と居住性を備えた後北条氏の動員体制を示すものとして史跡に指定されている。同じく八王子城とともに、在りし日の柏木城を考える上で参考となる。

柏木城の要点は以下のようにまとめられよう。

- 柏木城は、黒川城に代わる防衛拠点として蘆名氏の築城術を傾けた構造を呈しており、戦国末期を代表する山城である。
- 伊達氏との東北における戦国の覇者を決する戦い、秀吉による小田原征伐前段の決戦を予想しつつ、蘆名全軍投入をも計ったとみられる城である。
- 時代的にも地域的にも、当城に匹敵する遺跡は東北では稀であろう。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくしまけんやまぐんきたしおぼらむら　かしわぎじょうあと								
書名	福島県耶麻郡北塩原村　柏木城跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	北塩原村文化財調査報告書								
シリーズ番号	第3集								
編著者名	布尾和史、布尾幸恵、木村郁夫、五十嵐怜、長島雄一、石田明夫、高橋　明、高橋　充、鈴木　啓								
編集機関	北塩原村教育委員会								
所在地	〒966-0404　福島県耶麻郡北塩原村大字北山字村ノ内4147 〒966-0402　福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字下六郎屋敷2134（平成26年 4 月～）								
発行機関	北塩原村教育委員会								
発行年月日	2014年 3 月31日								
所収遺跡名	所　在　地		コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
かしわぎじょうあと 柏木城跡	ふくしまけんやまぐん 福島県耶麻郡 きたしおぼらむら 北塩原村 おおあざかしわぎじょうほか 大字柏木城外		4021	0021	37° 39′ 46″	139° 58′ 50″		表面調査	北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会による学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
柏木城跡	城館跡	中世	曲輪、堀切、馬出、 帯曲輪、柵形虎口、 土塁、石積み、石塁				戦国末天正後半期の山城。 虎口や土塁、区画施設に石積 みが多用され、高石垣が普及 する以前の城郭の特徴をよく 残す。会津蘆名氏が築いた境 目の城として伊達氏に対する 防衛拠点となった。		
要　　約	柏木城跡は、天正期後半の山城である。主郭を含めた中心部の規模は東西に約300m、南北に約200mで、周囲の山麓には更に遺構が広がっている。曲輪や土塁、馬出し、堀切など、遺構が良好な状態で残り、虎口や土塁、区画施設に石積みを使用しているのが特徴である。織豊系城郭が会津で展開する前段階の、天正期における石積みが多用された城郭である。 　　築城主は会津を本拠地とする戦国大名蘆名氏と考えられ、文献には天正12年築城と記載される。築城後は国境の護りの要となり、天正13年、伊達政宗ひきいる軍は松原出兵後大塩へ向かうが柏木城を眼下にして松原に引き返したという（「政宗記」）。 　　天正17年、摺上の戦いで蘆名義広が伊達政宗に敗れた後、廃城となったとされる。 　　城内の虎口や土塁などで使用される石積みは、同じく天正期後半に関東甲信越地方にみられる石積みを多用した戦国期城郭に類似しており、会津地方における代表例と言え、枅形虎口や大平石の採用も同じ頃のものとして時代性をよく表す。 　　北や西側には斜面を下った場所に連続する平場群があって城域は更に周囲に広がるとみられており、その規模も大きなものとなる。技術的には当時の最新技術が諸処に反映されており、会津の戦国大名蘆名氏の築城技術の粋が凝らされたものといえ、本城黒川城跡や向羽黒山城跡とともに重要城郭と言える。								